

「東日本大震災による被災小型船舶再生支援プロジェクト」 がスタートしました。



平成23年6月10日 南三陸町志津川修理場がオープン

東日本大震災では、約2万隻の漁船が被災しました。その中で再生可能な小型漁船が1000隻はあると見込まれています。しかし、被災地の造船所やFRP作業の出来る修理場はそのほとんどが壊滅しており、修理作業が出来ない状態です。この状況の中で、小型漁船の修理を1日も早く行うため、日本財団の支援を受けてこのプロジェクトがスタートしました。このプロジェクトは、国交省、水産庁、日本財団、全漁連、水産システム、そして舟艇工業会が運営委員会を結成し、仮設の修理場を被災地に10ヶ所設置して、船外機付漁船を主体に修理を行うものです。修理場のテント、プレハブ、発電機、コンプレッサーなどの設備そしてユニック車やフォークリフトなどのレンタル料及び工具などの購入費用を日本財団が負担します。舟艇工業会は、このプロジェクトの主業務である修理チームの設立、運営などを担当します。このために、ヤマハ、ヤンマー、スズキ、トーハツ、本田、日産の6社で舟艇工業会内にプロジェクトチームを設置しました。修理場が設置されるのは、宮古（2ヶ所）、釜石、大船渡（2ヶ所）、気仙沼、南三陸町（志津川）、石巻、東松島、亘理の10ヶ所です。

それぞれの修理チームは、各地区の地域賛助会員をチームリーダーとして運営されますが、実際の FRP 作業は、施設が被災し仕事が出来ない現地の作業員を雇用し、被災地の雇用促進にも貢献します。さらに、船の集積、積み込み、船および作業場の清掃などの作業は手の空いている漁民の方々をお願いします。一方、エンジンはすべて交換が必要となるので、船外機の販売、取付けや付属品の交換などを担当する各地区の船外機販売店も販売チームとして参加しています。

6月10日、最初の修理場として志津川がオープンし、マスコミを集めて開所式が行われました。朝日、毎日、読売、時事、共同、河北、夕刊フジなどの新聞、NHK、共同などのTV、舵、玄などの業界誌約15社が集まり、日本財団海野常務の挨拶、説明、宮城県漁連志津川支部の佐々木運営委員長の歓迎挨拶、チームリーダーの佐藤専務（佐藤鉄工）による施設及び修理作業方法の説明が行われたあと、修理完了1号船の「第1南三陸丸」の進水式、試運転が行われ、地元の漁師さんも加わって、この復興の兆しを祝いました。

このあと、大船渡、東松島、釜石、石巻、気仙沼と順次施設が開設し、6月中に10ヶ所すべての修理場で作業が開始される予定です。そして今後3ヶ月の間に、1ヶ所100隻、合計1000隻の修理を計画しています。



日本財団 海野常務の挨拶とメディアの方々



佐藤専務よりの修理作業説明



修理完了1号艇の進水



「第1南三陸丸」試走 快調です

修理場 仮設テント 10m x 20m プレハブ事務所（右） その向こう側に仮設トイレもある（見えていない） フォークリフトもレンタルしている



発電機、コンプレッサー、部品だな

集塵機



修理のため集められた小型漁船 エンジンは水没しており使用不能 新品に交換する



神社の方向を向いて参拝



恒例の餅まき (実は餅が入手できずカキ餅)



インタビューを受ける漁師さん うれしそうでした



しかし、志津川の街はまだ復旧が進んでいません、これからです



修理場の近くの被災した漁協施設



街はこのように全てなくなってしまった